

## COLUMN

## ドイツ滞在記

小野木 覚

総合研究大学院大学物理科学研究科機能分子科学専攻

おのぎ・さとの

名古屋大学理学部化学科を卒業後、平成19年に総合研究大学院大学物理科学研究科機能分子科学専攻へ入学、現在5年一貫制博士課程4年。分子スケールナノサイエンスセンター櫻井グループにて、非平面共役分子バッキーボウルのひとつ「スマネン」に、窒素や酸素などの「ヘテロ原子」を導入する研究に取り組んでいる。



ドイツベルリン自由大学Lentz研究室。左から2番目が筆者。右隣がLentz教授。

2007年4月1日に5年一貫制博士課程の1年生として入学してから早くも4年の月日が経とうとしており、入学当初は8人だった櫻井グループのメンバーもので55名を超えました。数えてみて驚くことにそのうち30名が外国からの研究者で、私の分子研での日々の半分以上は半数上の外国人研究者に囲まれていたことになります。このような環境で3年、4年と過ごしていると、日常的に英語でコミュニケーションが必要で、まるで日本に居ながら語学留学をしているようでした。このコラムではその経験を活かせる絶好の機会だった、ドイツへの滞在について記したいとおもいます。

事の始まりは、ドイツから3ヶ月の短期滞中に櫻井グループへやって来たBernd君とベルリンの話をしていた時のことでした。「君はベルリンに研究しに来る気はないか？」初めは話の流れから出た社交辞令的なものだと思っていましたが、それからすぐに担当教官の櫻井英博准教授からも「ドイツ行きたい？」とお話を頂きました。詳しい話を聞いてみると、Bernd君のボスであるDieter Lentz教授が、一人研究者を招いてくれるとのことでした。これはまたとないチャンスだと思い、二つ返事で「行きたいです」と言いたい

所でしたが、10月には総研大のセミナーでタイ、12月には学会でハワイに行く事が既に決定しており、こんなに海外にばかり行ってよいものか悩みました。しかし、最終的にドイツへ行って研究が出来るという魅力が勝ち、2010年11月のドイツベルリン自由大学Lentz研への滞在が決定しました。

「滞在先のベルリン自由大学は東西ベルリン時代に、東側の統制的な大学運営に反発した学生や教員達が、西側のダーレム地区に古い民家などをキャンパスとして創立された大学で、大学周辺は住宅街なので大きな商業施設は少し離れた所にバスで行く必要がある。」などなど、事前に知るべき情報は、日本に滞在中だったBernd君より十分に聞く事ができ、ベルリンまでの航空券をおさえ後はまったくスムーズに準備が整って、出発の日を迎える事が出来ました。

到着したベルリンテーゲル空港へは、やはりBernd君とそのガールフレンドのBeritさんが迎えに来てくれていました。このふたりは大の親日家で日本へ3回訪れており、そのうち2回およそ半年間を櫻井グループで共に過ごしました。特にBernd君は年齢も学年も同じで気が合う友人として、ラーメン屋を案内したり、観光スポットを紹介した

りする仲となり、今回のドイツ滞在中でもいろいろとお世話になりました。そんな訳で、お互いに「ここが日本ではなくドイツなのが信じられない、夢のようだ」と言いながら私のドイツ滞在がスタートしました。

ベルリン自由大学はベルリンの南西に位置するダーレム地区にあり、その創立の歴史からかいったいどこが境目なのかわからない程、まわりの住宅街にだけ込んでいました。そのなかでひと際目立つ背の高い建物が私が通った無機化学研究棟でした。周りにはレンガ調の茶色っぽい建物が多いなか、比較的新しいダークグレーのタイルで覆われた鉄筋コンクリート造の研究棟はとても印象的で、Lentz先生や学生たちは「アグリーな建物だ」と嫌っていました。このようにドイツ人が伝統的なものを愛するところは、ベルリンの町並みや会話の端々にみられ、なんだかドイツの文化に触れることが出来た気がします。

さて、日本からのお土産も無事渡したところで、研究を初めるにあたりLentz先生とディスカッションを行う事にしました。私はそのディスカッションで、具体的な実験内容や予定などを決めるつもりで臨んだのですが、なかなか話が具体的にならず、大学の歴史

やら化学の歴史やらなんだか昔話のようになってしまいました。はじめは私の英語力の問題かと悩んでいましたが、ラボのメンバーにその話をすると、みな声をそろえて「先生はそういう人だから仕方ないさ」と大笑い。彼らの助言を受けて、具体的な研究予定を立ててディスカッションに臨むと「それは面白い是非やろう」と、5分で終了してしまいました。確固たる自分の意志を持ってディスカッションに向かう事の大切さを痛感した瞬間でした。

Lentz研は教授と学生がいるだけで、

助教やポスドクなどのスタッフがいません。そんな環境とLentz先生の人柄のおかげで、学生はそれぞれ独立した考えを持っていて、研究も個々が自分のアイデアで進めているようでした。もちろん先生は助言をくれますが、いき詰まるまでは自分でなんとかする習慣が根付いているようで、日本でも見習いたいと思います。また、活動時間は朝は9時頃から夜の7時頃で、日本と比べると短いように感じましたが、そのぶん集中して研究に取り組む事ができ効率的に進める事ができたように思

います。これも日本に持ち帰りたい習慣の一つです。

今回のように短い期間ながら海外で生活する機会を頂き、日本での研究生活にあらたな視点を持ち帰る事ができたように感じます。また、英語でのコミュニケーション能力や外国人と意思疎通を行う能力は、分子研での生活で確実に養われている事が確認できました。このような機会を与えてくださった櫻井先生やLentz先生に心から感謝いたします。

## E V E N T R E P O R T

### 学生報告 平成22年度海外総研大レクチャー

物理科学研究科機能分子科学専攻 5年一貫制博士課程3年 杉浦 晃一

平成22年11月22日から4日間にわたり海外総研大レクチャーに参加し、タイのチュラロンコーン大学を訪問しました。私は、「アジアの学生と交流してみたい、英語の研究発表をしてみたい」と思い参加を決めました。まず驚いたのは、タイの学生が話す英語の流暢さです。私も流れるように英語が出てくればいいなど実感しました。次に驚いたのが、タイの料理です。非常に辛いものが多く、香草のパクチーで味付けしてあり、日本にはない香ばしい味のものが多かったように思います。

チュラロンコーン大学において、両大学の先生方の研究活動について講義を受けました。3分間の口頭ポスター紹介では、英語のプレゼンテーション

に戸惑いながらも、学生全員が英語で説明することができました。その後のポスターセッションでも、英語でのポスター発表なので説明が難しい反面、次回の発表への課題がわかり大変勉強になりました。また本レクチャーに宇宙科学専攻の学生が参加したことで、専攻間を超えた異分野学術交流の場ともなりました。

昨今、学術領域でも若者が海外に行きたがらないという傾向が強いと報道されていますが、海外総研大レクチャーをきっかけに「海外で自分の研究結果を発表したい」という積極的な学生がもっと増えればいいなと思います。



Koichi Sugiura

豊橋技術科学大学工学部電気・電子工学課程を卒業後、平成20年4月に総合研究大学院大学物理科学研究科機能分子科学専攻へ入学。現在、五年一貫性博士課程3年。電子物性研究部門中村グループにて磁気共鳴装置やX線構造解析を用いた有機導体TMTTF塩の電子状態研究に取り組んでいる。

